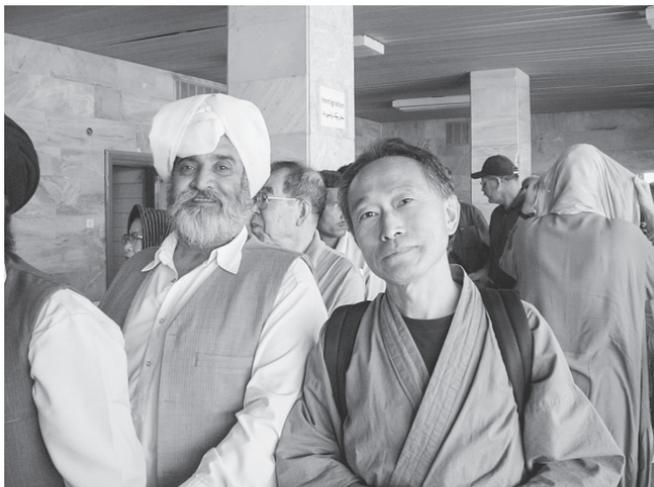


第2章 「ショック・ドクトリン」を応用した南米諸国の「クーデター」、 アフガニスタンにおけるCIAの「サイクロン作戦」



アフガニスタン首都カブールでの私



米軍による空爆後のカブール

1

前章で私は次のように述べてブログを閉じました。

さて、軍事攻撃による「クーデター」という手段は、まさに「ショック療法」そのものですが、それが「チャーチ委員会」によって世に知られるようになってからは、内外の世論の批判が厳しくなり、CIAは次の手段を開発し始めます。ひとつはイスラム原理主義勢力を利用する方法でした。

もうひとつは、「カラー革命」「色の革命、花の革命」という戦術でした。その典型例がグルジア（現ジョージア）における「バラ革命」二〇〇三、ウクライナにおける「オレンジ革命」二〇〇四でした。そしてウクライナにおける第2の「カラー革命」が二〇一四年のクーデターでした。

これも大手メディアでは「民衆革命」と褒めそやされていますが、『ウクライナ問題の正体』で詳述したように、実はこれも一種のクーデターでした。しかし、これを説明していると長くなりますので次章に回します。

2

しかし私はここで次のように書いたものの、その「ショック療法」が、どの程度「衝撃的」で「ショック」だったのかを何も紹介していないことに気づきました。

一 軍事攻撃による「クーデター」という手段はまさに「ショック療法」そのものですが、それが「チャー

「チ委員会」によって世に知られるようになってからは、内外の世論の批判が厳しくなり、CIAは次の手段を開発し始めます。

そこで本章では、次の二つの事実をまず紹介したいと思います。さもないとCIAがこれまでの戦術を変更せざるを得なかった理由が納得してもらえないのではないかと思つたからです。

(1) ピノチエト將軍によるチリのクーデターがどのように「残虐」であつたか

(2) その「ショック療法」をモデルにして次々と南米各地に引きおこされたクーデターは、世界にどのような影響を与えたのか

前章で紹介したナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』は、ピノチエト將軍によるクーデターの残虐ぶりを、次の第3章のすべてを使って詳述しています。

第3章「ショック状態に投げ込まれた国々——流血の反革命」(103-136頁)

しかし実を言うと、33頁という大量の頁数を使って詳述しただけでは、その残虐さをまだ伝えきれずに、ナオミ・クラインは章を改めて、第4章、第5章も、その「ショック療法」の「ショックぶり」に筆を費やしているのです。

第4章「徹底的な浄化——効果を上げる国家テロ」(162-137頁)

第5章「まったく無関係」——罪を逃れたイデオログたち」(163-180頁)

しかし、そのすべてを伝えるゆとりはありませんので、ここでは第3章にしほつて(しかもその一部しか)紹介できないのが、残念至極です。読者の皆さんで、心と体にゆとりのあるかたは、ぜひとも原著にあたっ

ていただきたいと御願ひする次第です。

3

さて第3章の冒頭は次のように始まっています。

アウグスト・ピノチエト將軍とその支持者は、一九七三年九月一日の事件を一貫してクーデターではなく、戦争と呼んでいる。

サンティアゴ市内はまさに交戦地帯の様相を呈していた。戦車が大通りを走りながら発砲し、戦闘機が政府機関の建物に空爆を加える。だがこの戦争には奇異な点があった。戦う側が一方しかないのだ。

最初からピノチエトは陸海軍と海兵隊、そして警察軍を完全に掌握していた。一方のサルバドル・アジェンデ大統領は支持者を武装防衛隊へと組織することを拒んだため、彼の側には軍隊はいっさい存在しなかった。

唯一の反対勢力は、大統領政庁「ラ・モネーダ」とその周りの建物の屋上で民主主義の府を守るために勇猛果敢に抵抗した大統領と政権中枢の人々だけだった。フェアとはほど遠い戦いだっただけだ。官邸



ヘンリー・キッシンジャー 國務長官とピノチエト將軍、一九七六年

内にはアジエンデの支持者がわずか36人しかいなかったのにもかかわらず、24発ものロケット弾が撃ち込まれた。

ソ連（指導者レーニン）やキューバ（指導者カストロ）の革命政権は、腐敗した王制や独裁政権にたいする武装闘争の結果として生まれたものですが、一九七〇年にチリで誕生した社会主義政権は、武器ではなく選挙で誕生した世界初の社会主義政府でした。

このアジエンデ大統領について、ナオミ・クラインは前掲書で次のように述べています。

アジエンデはラテンアメリカの新しいタイプの革命家の一人だった。チェ・ゲバラと同じく医者だったが、アジエンデはロマンティックなゲリラと言うより、気さくな学者といった雰囲気を見せていた。フィデル・カストロに勝るとも劣らない激しい調子で街頭演説を行なったが、チリにおける社会変革は武装闘争ではなく選挙によってもたらされるべきだという信念をもつ、徹底した民主主義者でもあった。（第2章88頁）

私は、アジエンデが、カストロに協力してキューバ革命を闘ったチェ・ゲバラと同じく医者だったことに尽きぬ興味を覚えます。彼らにとっては「身体を治す」「病気を治す」ためには「社会を治す」つまり「貧困をなくさねばならない」と考えたわけです。

ですから、「武器ではなく選挙で革命を」と考えたのですが、チリの経済を支配していたアメリカ企業は、これを許そうとしませんでした。そのようなすは前掲書では次のように述べられています。

— 一九六八年の時点で、アメリカの海外投資の20%はラテンアメリカに向けられ、米企業がこの地域

に持つ子会社は5436社を数えた。

こうした投資は膨大な利益をもたらした。アメリカの鉦山会社はそれまでの50年間に、チリの銅鉱業（世界一の規模を持つ）に10億ドルの投資を行なったが、そこからじつに72億ドルの収益を得ていたのである。

アジェンデが当選すると、アメリカ実業界は就任式を待たずにアジェンデ政権に宣戦を布告した。その中心となったのはワシントンに本拠を置く「チリ特別委員会」だった。

メンバーはチリに子会社をもつアメリカの大手鉦山会社や、委員会の事実上のリーダーであり、まもなく国有化されるチリの電話会社の株式を70%保有していた国際電話電信会社（ITT）などである。プリナ社、バンク・オブ・アメリカおよびファイザーケミカル社も、さまざまな段階で代表を送っていた。

つまり、アメリカ企業はチリを食いものして莫大な利益を上げている反面、チリの一般庶民は貧困のまま置き去りにされていたのです。

貧困は医者にかかる機会や教育を受ける権利を奪います。この「世直し」「社会を治す」ことを目指したのがアジェンデだったのですが、ITTを初めとするアメリカ企業はこれを許そうとしませませんでした。

彼らはワシントンに本拠を置く「チリ特別委員会」をつくり、CIAまで利用してアジェンデ政権を倒そうとしたのです。その先兵として使われたのがチリ軍部すなわちピノチエト將軍でした。

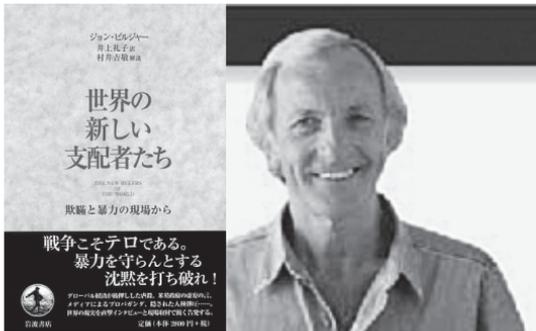
アフガニスタンに社会主義政権が成立し、今までの王制が民衆を貧困のまま置き去りにしていたのに対して新しいアフガン政権は女性すら無料で大学に行けるような制度に変えました。

以前にも紹介しましたが、その結果、アフガニスタンは大きく前進しました。そのようすをジョン・ビルジャー『世界の新しい支配者たち』（岩波書店二〇〇四・196）は次のように描写しています。

一九六〇年代に、アフガニスタンでは解放運動が起こった。その中心になったのはアフガニスタン人民民主党（P D P A）で、ザヒール・シャー国王の独裁支配に反対し、一九七八年、ついに国王の従兄弟、マハメッド・ダウドの政権が打倒された。それは、あらゆる意味で幅広い人民の革命だった。（中略）

新政権は、男女平等、宗教の自由、少数民族への権利、農村における封建制の廃止など、これまでは認められていなかった諸権利の承認を含む新しい改革計画を発表した。1万3000人以上が獄中から釈放され、警察のファイルが公式に焼却された。

部族主義と封建制のもとで、平均寿命は35歳、幼児の3人に1人は死亡した。識字人口は、人口の9パーセントだった。新政権



著書『世界の新しい支配者たち』、ジョン・ビルジャー

は貧困地域には無料医療を導入した。強制労働は廃止され、大規模な識字運動が開始された。女性たちにとっては、これまでに聞いたことのないような前進だった。一九八〇年代後半には、大学生の半数が女性となった。アフガニスタンの医師の40パーセント、教員の70パーセント、公務員の30パーセントは女性になった。

このような動きをアメリカは歓迎しませんでした。アフガンの眠れる資源をアメリカ企業が略奪することに障害となるからです。

そこでイスラム原理主義勢力を使って政権転覆させた結果、内戦となり、アフガンの女性は再び教育を受ける権利を奪われ、タリバンが支配する世界へと逆戻りすることになりました。

私はこの内戦が小休止している期間かいまに、幸運にもカブールを訪れ、破壊された学校を再建しているようすを見る機会を得ることができました。カブール市内も市外も内戦の傷跡が生々しく残っていて、見るも無惨でした。



アフガニスタンの首都カブールでの私